

2013 年度地域木材産業研究会、木材強度・木質構造研究会  
合同秋季シンポジウム開催報告

池田元吉（熊本県林業研究指導所）

平成 25 年 10 月 30 日（水）午後 3 時から、東京都江東区新木場の新木場タワー 1 階ホールにおいて、参加者 82 名のもと『森林と都市を結ぶこれからの木材強度学 - 木材強度データの蓄積・解析は、森林と都市の距離をどのように変え、今後どう変えられるのか！ -』と題したシンポジウムを、全国 LVL 協会、秋田グルーラム株式会社、日本木材加工技術協会の協賛を得て開催した。公設試委員会の活動を引き継ぐ地域木材産業研究会にとっては、木材強度・木質構造研究会との初めての合同企画であった。以下にシンポジウムの概要を報告する。

講演者は秋田県立大学木材高度加工研究所所長の飯島泰男氏である。講演の第 1 部は、「40 年をざっと振り返る」とのタイトルを、演者の趣味の鉄道 SL - C61 が力強く会場に運び込むかのようなスライドからスタートした。富山県木材試験場に就職された 1972 年を含む 1960 年から 2012 年までの“国内木材需給量の動向”スライドでは、木材完全輸入自由化、ドル変動相場制／2×4 工法導入、阪神淡路大震災、森林林業再生プランといったこの間の主な出来事と需要動向が説明され、演者自身の研究の背景への影響が語られた。



公演中の飯島泰男氏

試験場での研究、“最初の 10 年間”として、ソ連カラマツ材の構造用の製材、縦継ぎ加工材、集成材、LVL についての研究、枠組壁工法のための建築用木材の強度等級区分法確立に関する研究への参加、LVL トラスなどのスギ小径材の用途開発の研究が紹介された。この間、幸運にもいくつかのプロジェクトに参加できたこと、その後、永くて深いお付き合いをされることとなった先生方との出会いの紹介が印象に残った。

“次の 10 年”では、学会の木材強度・木質構造研究会幹事を務め、本日のシンポジウムタイトルにつながる「構造用木材－強度データの収集と分析」（‘88）の編集・発行を行ったこと、徳島、塩尻、熊本で開催された各地域の主要樹種の利用を考えるシンポジウムを企画・運営・資料作成を行ったことを紹介された。そのような活動が“3つの切り口”、“やぶにらみスギ材料学”など、独自の切り口による論文につながったことを紹介された。“秋田へ”では、最初の役職「課長補佐」のときに、これから勤める研究所本館に採用するため、ベイマツ－スギ異樹種構造用集



講演スライドから

成材の実験を企画し、その報告書を根拠に施工が実施されたこと、大館樹海ドームの材料評価法の提案と指導、小松幸平先生と企画された「木質構造研究の現状と今後の課題 Part-II」では「木質材料」の総括を行ったことなどを紹介された。'95年には木材学会調査班の一員として阪神・淡路大震災の調査へ参加、同年4月の研究所開設、その後、建築学会、住木センター、国交省、全国木工機械工業会の委員会などで委員長や主査を勤め、'99年に「木材強度および木質構造研究による東北地域の学術発展と研究成果の普及」により木材学会第7回地域学術振興賞を受賞されたことを紹介された。“最近の10年間”では、携わる仕事のキーワードが「環境」、「地域材」、「公共建築物」へとやや変化したと評された。この間の仕事として紹介された「地域材の物性・機能性データの整備委員会」における成果物「最新データによる木材・木造住宅のQ&A」、「木材の強度データ及び解説」は、筆者も日々の仕事で活用している。

講演の第2部“木材の規格と性能評価法”では、“国内地域別のスギ平角材の曲げヤング係数の出現率”を示し、材料側が材質の地域性を説明できるデータを利用側に示すことの重要性を説明された。地域性は、各地の公設試の役割を考えるうえで基本的な部分であると感じた。積み残された課題等として、エンドレスな「材料強度学」とならないためには「木材の材質研究」の観点が不可欠なこと、必要な「未加工」データの公開、含水率・寸法効果・めり込み・せん断など、時代の変化に応じて定期的な見直しが必要なこと、くわえて「規格」は社会的・行政的影響を受けながら決まるものだが、いったん決められると基本骨格の変更は容易ではないことを示された。これらのことは、筆者には、資源状態の変化により近い将来供給の主流となる構造用製材について、材質情報が添付された材料強度データが、日々、蓄積・収集され適時に規格内容に反映できるシステム構築の必要性を強く示されたものと感じた。

演者は公設試に永く勤めた経験から、『我々が進める応用的な研究は、少なくともなんらかの形で実用に反映されないと存在価値は半減する』と表現された。筆者自身、立ち位置をしっかりとしなくてはと感じた次第である。

当日の資料集には、演者が様々な雑誌、総説や論説に投稿された文章と今回発見された未公表原稿が収録されている。ぜひお読みいただきたい。シンポジウム後の討論会は、演者の交流の幅の広さをうかがうことができる多くの方々にご参加頂き、次なる交流につながったと感じた。最後になりましたが、開催にあたりご協力いただきました関係各位に御礼申し上げます。



講演後の記念写真